金的空手少女

玉子王子　著

一章　サボる悪ガキにはタマタマお仕置きだぞ★

うさぎ県のとある町の公民館。

世界一ドＳ女性の割合が高いといわれるうさぎ県だが、子供らはまだそんなことは知りもせず、無邪気に暮らしている。

この日、公民館に集まった子供たちはみな運動着。

近くのうさぎ女子校の空手部員たちによる交流のイベントに来ている。

空手部は毎週日曜、持ち回りで子供らに空手を教えていた。

子供たちも持ち回りというか、いつも同じ子らが来るわけではない。

空手が好きになれば、近くの道場に通うのが普通で、何も女子校生に習う必要はない。

あくまで、入り口になればという程度の意味のイベントである。

だからほぼほぼ、来る子供らは別の子たちだ。

親に言われて無理やり送り込まれたものも多い。

ある種のやんちゃな子供が、精神修養になればという期待とともに送り込まれる場合が多かった。

が、そういう子ほどまじめにやらないものだ。

今も、数人の悪ガキグループが――というとヤンキー風だが、みな一〇歳なのでただのクソガキといえる――便所に行くという名目で公民館の運動その他に使われる広い部屋を出て、便所の前でたむろしていた。

「やってらんねーよな、空手なんて」

「そうそう、クラブマガのほうが絶対強いって！」

「バカ、シラットだよシラット！」

「っていうか、空手だろうが何だろうが……」

子供が抜け出して放っても置けないので、空手部員の一人、というか主将の少女が呼びに出てくる。

男並みに背が高い、すらりとした少女。ただ、胸や太ももなど、肉がついていたほうがいい部分にはしっかり肉がついている。特に胸は付きすぎと思えるほどについているいわゆるスイカップである。

それを運動着の下に押し込み、ゆさゆさ揺らしながら歩く。

スイカップ美少女となれば普通なら情欲を掻き立てられるはずだ、しかし彼女を見た男たちは不思議と雌虎を見たようなある種の恐怖や畏怖を感じる。特に、太ももの間にぶら下がっている急所を不思議と普段以上に強く意識し、言いようのない不安を感じる。

その雌虎少女に気づかず、話し続けるクソガキたち。

「なんだろうがよお、女なんかに習っても強くなるわけねーよな」

「それな！　所詮女、タ〇キンもない出来損ない！」

「力ないんだから、空手なんて習っても無駄なんだよ、女ごときはよ！」

笑いあうクソガキたち。

それに、にんまりと笑いかける雌虎少女。

流石に気づき、クソガキらの頬が引きつる。

「あ、先生」

「タ〇キンもない出来損ないの先生で申し訳ないな」

雌虎、北山高菜。

背の高さから、爆乳越しに顔を見上げる形になる少年たち。

相手はとびぬけた美少女でもあるので、若さから勃起しても不思議ではない状況のはずだ。

しかし、不思議と肉玉がキュッと引き締まるのを感じる。

――なんなんだ、この女……こんなにすごい綺麗でオッパイも大きいのに……ほかの姉ちゃんたちと違ってなんか……すごく怖い、というか、不安になる。玉が縮む……

高菜の戦歴を感じ取っているのだろうか。

得意の空手で、**五桁近い睾丸を粉砕してきた男の天敵**といえる女だと感じ取っているのだろうか。

ナノテクが発達し、睾丸ぐらいなら秒で治る薬がコンビニで安く買える時代。

付いていない女たちが「治るのかー、じゃあいいよね」と、「潰れたらどうしよう」などと悩まず軽く金的してくるのはある意味では当然だろう。

だが彼女はいくら何でもやり過ぎではないだろうか。

というか、**玉潰しが好きすぎる**。

「とにかく、みんな練習に戻るんだ」

「へ、へっ、嫌だね。面倒だもん」

「それに、女ごときに習っても強くなれないから、か？」

「そうだよ」

「あ、ちょっと」

「いや、いいんだって。本当だもん」

「うふふ、そうかもしれないが、女が男より弱いとは限らないぞ。なぜなら……」

す、と素早くしゃがみ、少し背の高い少年の股座を掴む。

「あ」

真っ赤になり、股間を押さえようとして高菜の手が邪魔で押さえられない少年。

青ざめ、周りの三人が自分の股間をしっかり押さえて腰を引き、下がる。

ベロリと形のいい唇を舐める高菜。

――ああ、いいな……このおキンキンを何としても守ろうとする男の本能的な動き。何度見ても受ける、私は絶対やらないでもいい動きだ。私は付いてないから、こういうクソダサガードは必要ない、女である事への優越感で濡れる……

勃起と違い、服を着たまま濡れても周りに気づかれることはない。

平気な顔で手の中のモノをグニグニと確かめる高菜。

「うふふ、可愛い金の玉が二個、しっかり付いてるな。男の子だ」

「へ、変態かよ……」

「それより、反撃しないでいいのか？　ほら」

少年の手をつかみ、自分の股座にあてがう。

「お前も同じように握っていいんだぞ？　それで互角。引き分けに持ち込める」

「え、え、でも……」

年上スイカップ美少女の股間に手を押し付けられ、真っ赤になる玉握られ少年。

周りの者たちも顔を真っ赤にして、一物が立たないように必死で気を落ち着ける。

立ちそうなのは、股間に手をやられたからというだけではない。

いや、それも理由だが、単に「女性器に触ったから」興奮しているわけではない。

――な、なんだこの女、ふざけんなよ、握れって……何握れっていうんだよ、女なんだから、握るモンが無いだろ。ないから女なんだろ。なのに握れって……クッソ、一方的に握られて、玉握られて、同じように手を引っ張られてもこっちは握れない。握る物がないから……ずるい、女はずるい、キ〇タマがないなんて……男にはある弱点がないなんて……

不公平感。

それで興奮するというのもおかしな話だ。

しかし、している。

握られて、握る物がない部分に手を当てられている一人だけではない、周りの三人も疑似的にそれを体験し、興奮していた。直接握られ、手を当てられている者ほどではないものの。

――なんだこの状況、なんだよ……チ〇コ立っちゃう。タっちゃんがキ〇タマ握られて大変なのに……大変なのに、相手は女だから玉握りも金蹴りもできず、どうしようもないのに……そんなどうしようもない状況のにいるのに……

ギンギンである。

チラ、とその辺を確認する。三本見る高菜。

――あは、小さいといえども男子……チン〇ン立ってりゃ一目瞭然だな。うふふ、男は興奮隠せないで大変だな。私なんて濡れ濡れでも平気な顔なんか余裕でできるぞ。

「そらそら、早く握ってこい。急所握りは卑怯じゃない。危なくもないぞ、タマタマが潰れてもすぐナノメカで治るからな。治らない時代とは考え方を変えていかないと。敵に密着したら、こうやって金の玉をギュッと掴んで」

根元に的確に指を入れて、袋の中に玉を追い込む。

突如逃げ場がない小さい部屋に押し込まれたような恐怖に背筋が寒くなるクソガキ。

しゃがんでいるので、美少女の顔は目の前だ。チラ、とそれを見る。

にんまりとやはり笑っているが「いつでも部屋を圧殺できる」といっているようにしか見えない。

汗が噴き出す。

「ちょ、ちょ」

クソガキが何か言う前に、雌虎の目が吊り上がる。

「ギュッと掴んで……男の急所を握り潰す！」

「ひいい！」

「……いや、口で言っただけだ。ビビり過ぎだろ。ほら、お前もしっかり私のキ〇タマを握れ。それでお互い相手が握ってきたら握り返すという相互確証破壊が成立する」

「いや、でも……お、お姉さん……」

「んー？」

「き、キ〇タマないし！」

「んー、あ！　そ、そうだった！　忘れていた！　私は女の子だから……」

膝を開く。

思いきり、男なら不安でできない、争いの最中の大股開きを何も考えずに行う。

いや、考えている。

――ふふ、見ろ見ろ。私はお前たち男と違って、タマタマがついていないのでこんなポーズも余裕で取れるぞ。何ならがら空きの股に蹴りでも入れるか？　入れられないよな。だって入れたら、自分のお股に反撃が来るのは目に見えてるもんな。大事なおキンキンをやられる。しかも、相手は別に大したダメージも受けていないのと引き換えにだ、あは、絶対無理だよな？　タマタマキ〇タマをお持ちの男性様には。

「女の子だから、キ〇タマがないんだ！　あー、うっかりしておったわ」

「ふ、ふざけ……」

「んー？　何かな？」

　グニグニグニグニ、と手の中のモノを揉みほぐす高菜。

「はおおおお！」

「ひいいい！　やめてあげて！」

「いやいや、ふざけんなとか偉そうなことを言いかけたように思えたから……さすが男性様は態度がデカいなあと、思ったらつい手が動いてしまった。すまんすまん」

「え、偉そうなことなんて言うわけないですよ……なあお前ら！」

「そ、そうそう！」

「うふふ、よかった、お前らが優しい子たちで。私にとってもよかったし……お前たちの……金の玉にとっても幸運というしかない」

　キュ、とそれが縮み上がるのを感じる……というか、ほかの感覚が消失して玉竿がギュンギュンにしぼむ以外の感覚が遮断される四人のクソガキたち。

　いや、一人だけは玉はキュンキュンだが、竿はビンビンだった。

　見逃す高菜ではない。

　――おお、あのチョイ太めの子……結構大きめのチン〇ンしてるからもしかしたらと期待してたか……うふふ、ドMじゃないか。

この状況で立つのは多少はMっ気がある気もするが、ドMと判断するには早いだろう。

だが人間は見たいものだけ見るものだ。

「それじゃ、戻ろうか……んー、お前、歩きにくそうだな。名前はなんて言うんだ？」

「こ、小山です」

「小山か……」

一人、勃起状態なので仲間に遅れる小山の横を歩きつつ、耳に口を寄せる。

「でも、下は大山だよな」

「え」

「うふふ、お前……この中で一番立派なチン〇ンしてるだろ？」

「そ、そんな……」

玉を縮めて青ざめていた顔が、真っ赤になる。

仲間たちは高菜から離れたいので、さっさと行ってしまう。小山が遅れていることに気づきもしない。

というか、自分以外の三人が遅れてもさっさと歩き去るぐらいの精神状態だった。

一人に気づこうが戻るわけがない。

「ああ……」

「うふふ、おチン〇ンはデカいわドMだわ……これぞ日本男児だな。ドMの変態でこそ、日本男児といえる」

「ど、ドMって何ですか？」

「女の子が「金の玉を潰す」とかいうのを聞いたら、おチン〇ンが立っちゃう人のことだ。つまりお前だ」

「ち、違う……はぐっ！」

パシ、と軽く太ももを叩く。そのまま手を滑りあがらせ、股間のふくらみを握る。

「金の玉ニギニギ、金の玉ニギニギ……って、コレ男女逆だとタイーホだな。女でよかった」

愛おし気に、縮み上がった肉玉を揉み解す。

唾をのみつつ、見下ろす小山。

「お、女の人がやるのでもまずいような……はうっ！」

「そういうこと言うなら、この急所玉抜いて女同士になろう、なら合法だろ？」

　縮んだ肉袋に指をめり込ませ、握り込んでいく。

「縮んでるから握り潰されないと思ったか？　潰すぞ潰すぞ、私は余裕で金の玉を潰すぞ。どんな状況だろうが、握った玉は逃がさない。断固として粉砕する、二個ともだ。一個残すようなことは、玉再生が可能なこの時代にはそぐわないのでアップデートするべき」

「あおおおおお！　ちょ、ま……」

　仲間を目で探すが、もうとっくに曲がり角を曲がって姿を消していた。

「さあ、合法？　非合法？　お姉さんの行動はどっちかな？　答えによってはお前は今日から女の子だ。女同士なら文句なく合法だしね」

「合法です合法です、お姉さんは女の子様だから合法です！」

「お、そうだな。というか、縮んでこれならお前、金の玉もデカいな。さすがドM戦士」

　――なんだよその戦士は。

「M・戦士編」

　――何のタイトルなんだよ。

「そろそろ歩けるかな？」

「え、あ、はい」

「それじゃ、頑張って練習するんだぞ。というか、教えてやる」

「ええ、僕その……別のお姉さんがいいな……あああああ！　嘘、やっぱりお姉さんがいいです！」

「男を支配するには、胃袋を握るよりやっぱりキ〇タマ袋を握るのが最高だな」

　――ふふ、今の私のキ〇タマ発言でもこのM戦士ときたら、ビクっと立派なチ〇ポが震えたぞ。この感じ、大人でも巨根といえるサイズだ。私は実のところ小さいほうが好きだが、贅沢は言わない。というより変態野郎は大体チ〇ポがデカいからな、Mにおいても例外ではない。だからデ〇チンはいやだなんて言ってたらM野郎と遊ぶ機会は激減するから、当然我慢するという理屈だ。

　股間を庇いつつ、緩々歩く小山の肩に手をやりつつ、逃がすまいと歩く高菜。

体験版終わり

この後、同年輩の女児たちに玉責め組手の後、

お姉さんたちの風呂を覗いて金責め逆レイプを食らう男児たち……

続きは製品版でぜひお楽しみください